

＜テーマの設定理由＞

この日は肌寒かったため、子どもたちと一緒に砂山に橋を掛けたり、タイヤを並べてトンネルにしたり動いて遊べる設定を作った。タイヤを運ぶ際、タイヤの中に氷ができていないことに気付く子がいて、氷遊びが始まっていった。

＜活動スケジュール＞

1年を通して砂水遊びを継続的に取り組んでいる。
冬の時期も砂遊びに取り組んでいるがこの日は冬の自然物を発見したり、動いて遊べるような空間づくりを意識した。

＜活動のために準備した素材や道具＞

砂・水・スコップ・バケツ・板 等

＜環境をデザインする・探求活動の実践＞



タイヤの中に氷が張っているのを見つける。「あ！凍ってる！」と氷を取り出す子を見て、数人が集まり他のタイヤも見て氷をほじくり出す。「うわ！でっかい！」「きれい！宝石だ！」「砂がついてる」「砂が固まっている？」「でも冷たい！砂の氷だ」と子どもたち。大人が、「磨いたら宝石みたいに光るかな！？」と言うと、「水で洗おう！」とタライへ行き、洗い始める。きれいな氷は、霜柱を探していた他児に見せに行っていたが、砂だらけの氷はこすって砂を落とそうとするが、なかなかきれいにならない。そのうち、「じゃあ、そのまま入れておこう！」とタライに入れてそのままにしていた。

寒かったが日向は温かく、おままごとをする子が多かった。最初はそれぞれが自分のイメージを持ち並行遊びをする様子が見られた。霜柱で遊んでいた子たちも、おままごとに来ては「氷ふりかけはありますか？」「います！」等、やりとりをしながら遊びに参加し楽しんでいる。しばらくすると、「何作ってるの？」「一緒にやろう」「食べてもいい？」等、会話を通して遊びが繋がっていった。数人がイメージを共有しながら、お皿を並べ、それぞれが作ったものを配膳し“レストランごっこ”へと発展していった。

水の入ったタライは砂を入れる子がいたが、誰も気にせずそのまま大きなタライケーキ作りが始まる。砂を固めるためにバケツを使ったり、水を持ってきたりと工夫しながら、数人で作っていたが、ひっくり返すには重く、大人を頼る。きれいにひっくり返ったのを見て、さらに人が集まり、それぞれのトッピング(葉、石、枝、花びら、白砂等)を乗せていく。「切るよ～」の声にお皿を持ってきて「ちょうだい！」「私も！」と受け取りにくる子がいたり、それぞれで遊びつつも、友だちと繋がりがながら楽しんでいた。

遊び出し：並行あそび（葉を使ってお料理、石でアイス作り、泥でカレー、タライケーキ作り 等）

友だちと一緒に遊ぶ
(レストランごっこ、タライケーキ作り)



＜振り返り＞

- ・氷を見つけたことから、興味を持ち楽しんで磨いていたが、タライの氷を忘れる姿を見ると、子どもの満足度や、遊びや興味の移り変わりは大人が思っているものとは違っていた。子どもたちの目線に立ち観察することの大切さを感じた。
- ・“おままごと”という共通の遊びをしながらも、対面ではなく、背を向け合ったり、横に並んで個々に集中していた姿から、繋がりが出てくると隣の子へ広がり、言葉でのやりとりが始まることで、聞いていた子に興味や関心が広がり、一緒に遊ぶ姿へと変化していた。“言葉でのやりとりができる”ということがとても大きいと感じた。